

國學院大學學術情報リポジトリ

「神道」はどう翻訳されているか：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-22 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, ウエイマイヤー, アン, マクナリー, マーク, ベンテリー, ジョン・R, マセ, フランソワ, 魯, 成煥, ハーディカ, ヘレン, プロール, インケン, ベルトン, ジャン=ピエール, 櫻井, 治男, ロコバント, エルンスト, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000502

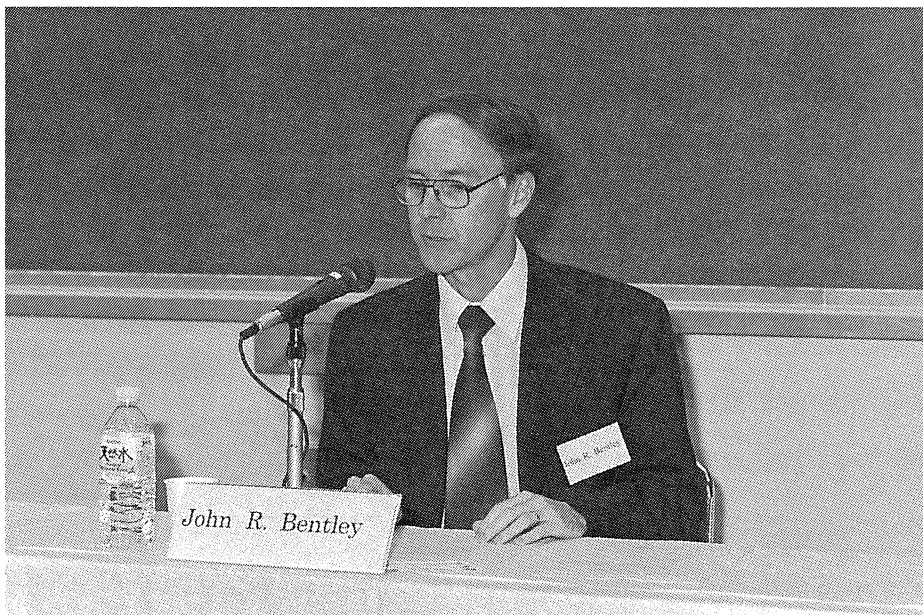
〈神道〉はどう翻訳されているか

第2セッション：神道古典の部

<発題 3>

日本書紀の英訳について

ジョン・R・ベンテリー

[illegible]

【井上】

おはようございます。昨日に続き、シンポジウム第2部を開催いたします。昨日の「国学の部」に引き続き「神道古典の部」ということで3つのご発題をいただき、最後に総括討論をしたいと思います。長丁場ですが、昨日同様、積極的に議論に参加していただき実りあるものにしたいと思います。

本日は、3つの部会を中牧弘允先生にお願いしております。それでは中牧先生、よろしくお願いいたします。

【司会（中牧）】

いま紹介にあずかりました中牧です。大阪の国立民族学博物館に勤めておりますが、人類学という分野の人間が神道関連の文献の翻訳ということで司会を仰せつかっておりますので、どうぞお手柔らかにお願いをしたいと思います。

今朝は神道の翻訳に関して、恐らく目の覚めるような報告をしていただけるのではないかと思います。北イリノイ大学のジョン・R・ベンテリーさん。「日本書紀の英訳について」というタイトルでお願いをいたしますが、報告は一応40分、質疑応答が40分ということにさせていただきますと思います。それでは早速、よろしくお願いいたします。

発題

ジョン・R・ベンテリー

1.序文

私は、歴史言語学者なので、今日のテーマを言語学の観点から発表させていただきたいと思います。14年前に「日本書紀」の新しい英訳が必要になってきたのではないかと私は思うようになりました。その時までには私は、「先代旧事本紀」の英訳を完成していましたが、日本書紀の英訳もあまり難しくないだろうと推測していました。ところがこれはとんでもない誤解と分かりました。問題を数学に例えると、「旧事紀」の英訳は代数のようなものでしたが、日本書紀の英訳は微分学のような厄介なプロジェクトになってしまったのです。そのプロジェクトは今年の三月に遂に完成に至りましたが、今日は、その英訳についてのいくつかの問題点と解決策について話してみたいと思います。

第一の問題は「翻訳」という言葉の哲学的な解釈であろうと思います。「翻訳」という作業の困難なところは、原文をそのまま直訳できるのか、原文を解釈するだけで終わるのかということです。私の個人的な考え方ですが、「翻訳」というのは、原文の発想を外国語に移すだけの作業ではなく、できる限り原文の言語学的な要素も直接的に外国語という新しい器に移す必要があり、それが実現できるように努力すべきことが本当の意味での翻訳と言えるのではないのでしょうか。具体的な例をもって、説明を加えましょう。

日本書紀には、「海」という字には二つの異なるルビが振ってあります。ウミという読みがあるし、ワタという読みもあります。この小さな違いを重視して、私は、違う英語の訳を試みました。上代語で、ウミとは、「大水をたたえているところ。海を指すことが多いが、湖・池などにもいう」（「時代別国語大辞典、上代編」、131 頁）とあります。ワタとは、「海。上古における海は、葬場の一つであり、その海の^{かなた}彼方を他界と考えた」（「時代別国語大辞典、上代編」、819 頁）ということです。英語の sea は、ウミと同様、海であろうと、湖であろうと、大水を指します。英語の ocean の本来の意味は、地中海以外の大水を意味し、潜在的な意義は、遠い海ということで、ワタに近いのではないかと思います。ここで、翻訳の一つの対策として、原文の当時の言葉遣いにできる限り忠実に英訳することにしました。

それでは、もっと複雑な問題はどうか対応すればいいのでしょうか。「神」という日本語の言語学的な発想を英語にどのように訳せばよいのでしょうか。この問題は極端に難しいので、多くの学者はそのまま「カミ」として英語にってしまう傾向があります。これを借語と言います。例えば、古代において、日本に生息していないラクダ科の哺乳類の動物が大陸からの書物に出てくると、その動物の呼び名を日本語に直すには、中期中国語の lak-da（駱駝）をそのまま日本語に借語として取り入れるという道しかありません。しかし、神という言葉と同様の扱いにしまうと、日本の文化の一部を外国の読者と分かち合う機会が失われるのではないのでしょうか。当然、ある程度の説明を付け加えてもいいのですが、人間にとって、一つの文より、一つの単語の方が覚えやすく、単語を訳するのが翻訳者の義務でもあると私は思います。

英語の God という言葉は日本語の神とは基本的に意味が違います。日本語で「神様」というのが最近の新しい言葉遣いですが、それはまた飛鳥・奈良時代の「カミ」とは異なります。英語の God と違って、歴史的に日本語の「神」は特定の、全知全能の絶対的な存在を意味しません。自然の神秘的な、人間の智慧を超える、畏敬的な存在を、人間であろうと、動物であろうと、自然の現象であろうと、すべて「カミ」と呼ぶのは古例です。それでは、「カミ」を英語に訳す時はどうすればよいのでしょうか。やはり「カミと申す^{なのこころ}名義はいまだ思ひえず」と本居宣長が説いたところまでしか説明ができないのでしょうか。

一つの解決策として、言語学という原点に戻って、解決の糸口を探るとしましょう。飛鳥・奈良時代の文献の、色々な言葉は万葉仮名で書かれているため、この特定の表記によって様々な面白い事実が反映されています。これを歴史的仮名遣いと言いますが、現代日本語においては同音異義語であるにもかかわらず、飛鳥・奈良時代には、発音が違っていた対応的な言葉がかなりあります。「かみ」という語はその一つであります。次の例で詳解しましょう。飛鳥・奈良時代の文献、古事記・日本書紀・万葉集にある綴りを使って、次のデータを紹介します。「かみ」と読める語は大きく分けて、次の二つのグループがあります。

グループ	古事記	日本書紀	万葉集
------	-----	------	-----

甲 「上」	賀美	伽彌	可美
-------	----	----	----

乙 「神」	加微	柯微	可未
-------	----	----	----

これで「ミ」の音価で二つのグループに分けられます。一つのグループは、「美・彌」で表記され、もう一つのグループは、「微・未」で書かれています。飛鳥時代には、これらの二つのグループが、相通することはまずありません。即ち、乙類の「神」という語は甲類の「美・彌」で表記されることはありません。さて、その違いは何でしょうか。

それでは、中期中国語の再構築というレンズを使って、飛鳥・奈良時代にこれらの二つの「カミ」はどこが違っていたかを分析してみましょう。そのために二人の中国語歴史言語学者の研究を紹介したいと思います。一人は、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学の Edwin Pulleyblank 教授ですが、彼の中期中国語前期の研究によるとこれらの表記を次のように分析できます。

グループ	古事記	日本書紀	万葉集
------	-----	------	-----

甲 「上」 賀美	ya-mi	伽彌 kha-mji	可美 kha-mi
----------	-------	------------	-----------

乙 「神」 加微	kai-muj	柯微 ka-muj	可未 kha-muj
----------	---------	-----------	------------

次に米国のワートバーク大学の Axel Schuessler 教授の初期漢時代中国語の研究で同じ表記を分析して、Pulleyblank の研究と対比しましょう。

グループ	古事記	日本書紀	万葉集
------	-----	------	-----

甲 「上」 賀美	ya-mi	伽彌 ga-mie	可美 kha-mi
----------	-------	-----------	-----------

乙 「神」 加微	ka-mui	柯微 ka-mui	可未 kha-mui
----------	--------	-----------	------------

この二人の研究は独自で行われたにも関わらず、類似点はかなりあります。ここでいくつかの面白い事実が浮き彫りになりますが、特に甲乙ミの母音音素の違いに注目していただきたいのです。甲類のミの母音音素は、/i/ であったと推定できます。乙類のミの音素は単音素ではなく、二重音素だったということが両氏の研究で立証されていることは非常に重要であると思います。この二重音という形跡は不思議な現象ではなく、まさに事実を反映しているのです。

神武天皇の忌み名のカムヤマトイワレヒコなどによく見られる現象で、上代語では「神」という語の多くはカムと読まれています。それゆえ、「^{かみ}神」の変化形はカムであるということ を考慮すれば、上のような表記が使われたことは逆に当然であると言えるのです。万葉仮名は今まで考えられた以上に上代日本語の音韻を正確に表しています。一つの重要な結論は、上を意味するカミと畏敬心を招く霊的な力のある存在を意味するカミは元々別の言葉であったということです。これは前から言われてきたことですが、納得されていない学者がまだいらっしゃるようです。

ある学者のグループは、「常陸風土記」の記事を引用して、「上」と「神」の両者を語源的に結ぶ意識があったと指摘していますが、これは甲類と乙類の音素の区別がなくなった奈良時代後期の音韻的な事実に基づいている論に過ぎないと思います。現代語の例を挙げますと、「数字」と「鼻血」が今相通すると同じ現象で、「じ」と「ぢ」が同じように発音されています。しかし、歴史的な仮名遣いを見ますと、この二つの音節が異なる音価であることが分かります。

このように神道の曙にそれほど隔たりがない飛鳥時代の音韻の原則を把握し、その語の発想を正確に分析ができれば、英語への転用もよりしやすくなるのではないかと思います。「神」は上に存在するモノであるから、カミと名づけたという古い説は成り立たないことを明言します。

私は、英語の deity という言葉を使って、「神」を英訳します。「オックスフォード英語辞典」によると、deity は、①ある神の位、②ある神聖な存在、人、物にかかわらない、ある民の崇拝の対象、③卓越の人物、宇宙の創造者という定義があります。ここでは、②の意味が日本語の「神」に非常に近いと思われます。カミとカムの関係に似ている現象ですが、deity は divine という変化形もあります。

私はこのようにすべての問題が言語学によって解決できるとは思っていませんが、言語学という鋭い刃物で、ある程度の虚実性を確かめることが可能になってくると確信しています。ここでの一つの結論は、日本書紀のような上代文献を翻訳するという作業は、言語学の助けを借りなければ、非常に難しくなるということです。

2. 日本書紀の難点

日本書紀の英訳という話題に移りたいと思います。日本書紀英訳は明治 26 年（1896 年）に出版されたジョージ・ウイリアム・アストン氏の完訳が最も有名でしょう。故坂本太郎先生もアストン氏の英訳を賞賛して、学生にこれを読むように勧められたそうです。最近になって、ロシア語とフランス語の訳も出版されました。それでは、アストン氏の賞賛される英訳版が存在するにもかかわらず、14 年間に掛けて、私が日本書紀を再び翻訳した理由は何でしょうか。私はアストン氏の日本書紀の英訳に不満を持っている箇所がいくつかあります。一つは書紀歌謡の英訳が時代遅れになっていることであり、もう一つは全体的に言えば、その英訳に収められている情報の古さがあります。私は、翻訳において歴史言語学の進歩によって得られた情報の必要性を痛感し、言語・歴史・文学・神道というい

くつかの分野の最新研究を元にして、日本書紀をもう一度検討したいという強い願望があったということは否定できません。最終的に私はアストン氏の英訳と原文を比較した際、日本書紀の豊富な情報の一部しかアストン氏の完訳に入っていないということに気が付き、新しい英訳が不可欠と痛感しました。そういう訳で、14年前に日本書紀の完訳という長い旅に旅立ちました。

まず、日本書紀の英訳に当たって、私はいくつかの基本的な選択を強いられました。日本書紀の文のほとんどは漢文で書かれていますが、それをそのまま英訳するのか、その漢文に日本語が潜在的に意識されているので、書き下し文を英訳するのかという重要な問題に直面しました。私の基本的な方針として、漢文で書かれた書物なので、その文を中国語として扱い、翻訳しました。ただし、「海」という漢字にルビが振ってある時と同様、いわば間接的な漢字の解釈が文献に残されているならば、その情報も視野に入れることにしました。歌謡は音仮名で表記されているので、それを古代日本語として扱いました。

ここで、日本書紀を翻訳するという作業の難点をいくつか説明して、これらの難儀の関をどのようにして通過することができたか発表したいと思います。古代歌謡は、神道と直接関係がないと思われる傾向がありますが、「万葉集」と同様、神道の古代精神を表現しています。即ち、古代の歌というものは、人々の生活に密着した思想や情感を物語り、古代人の心の柱となっている信仰や精神を代表しているという点に於いて非常に大切です。書紀歌謡の解釈・翻訳は大きな難問であるのは周知の通りでしょう。

古代歌謡の翻訳は、飛鳥時代の言語学を把握していなければ、誤訳してしまう危険性が十分あります。言語学という道具がない際の、その解釈の難しさの例をいくつか上げましょう。神武紀の「エミシを」歌は有名な例の一つです。最初に原歌と最も一般的に行われている解釈を提示します。

愛瀨詩烏	蝦夷を
毗儼利	ヒダリ
毛々那比苔	百人
比苔破易陪迺毛	人は言へども
多牟伽・毛勢儒	手向かひもせず

小学館の日本書紀の現代訳は、「蝦夷を^{いっきとうせん}一騎当千の兵だと人がいうけれど、我らには全然手向かいもしないぞ」となっています。私が知る限り、この解釈はほぼ定説になっていますが、ここで言語学というレンズを通してこの歌を再吟味しましょう。九州大学の高山倫明氏の20年前の研究で、彼は日本書紀の歌謡が万葉仮名を使って、巧妙に表記されていると発表しました。一言でいえば、日本書紀編纂者はその歌謡の音節を一字一音選ぶことによって、古代日本語の音韻だけではなく、日本語のアクセントも透明に表記しようとしたことが判明しました。例えば、「ヒト」という語の歴史的なアクセントは(京都の)高低(HL)であります。「忍坂の大室屋に」という歌には、ヒトは二回とも「比苔」という万葉仮名で

表記されています。「比」は中期中国語の *pji*˥ (上がるアクセントは高と解釈する) で、苔は *tʃaj*˥ (平調は低いと解釈する) であり、「ヒト」の歴史的なアクセントの高低(HL)を正確に転写しています。勿論、中期中国語の声調と音韻に限界がありましたので、このアクセント表記は日本語の音韻とアクセントをぴったり表すことができませんでした。しかし、高山氏が説明したように、神武紀歌謡の言葉の八割以上のアクセントが正確に表されていると言い、この割合の高さは注目されるべきことです。

それでは、「エミシを」という歌に戻って、第二句の「毗儼利」を注目していただきたいと思います。大野透氏が30年前に解説しましたが、この三字はヒタリと読めません。「儼」はダとしか読めないで、この句をヒダリとして読まなければなりません。となると、この句の解釈が問題となってきます。ヒダリがヒトリ(一人)の変化形という今までの、無理のある説明をここで見直し、もっと合理的な解釈が存在するはずだと云いたいのです。この問題を解くため、まずアクセントを見ましょう。この三字のアクセントは低高高(LHH)で、「左」の歴史的なアクセントにぴったり合っています。その意味は、「蝦夷を・左にして・百人だと人は言うけれども…」という風になりますが、少し不自然な気がします。左側を意味する左は古代日本で^{とうと}尊ばれていたもので、征服された敵を左側にして歌うのは不審です。

もう一つのありうる解決は、この「ヒダリ」が古代日本語から早く消滅した動詞の連用形であるということです。古代日本語から消滅したのならば、どのようにしてその存在を立証することができるでしょうか。古代日本語と姉妹語の関係として存在する琉球語を参考にしましょう。先島諸島の石垣島の言語には、「左」は *pīdarī* (アクセントは HHH) がありますが、動詞形の *pīdarun* (アクセントも HH-) もあります。この動詞の意味は、「感情を害する・不機嫌になる」ということです。沖縄本島の首里語には

hwizarugisan (< **pīdar* + *u* + *n*) という形容詞もあり、意味は「不器用らしい」ということです。両動詞は否定的な意義があります。この形容詞も、石垣の動詞も **pīdar* という動詞から発生しました。この **pīdar* という動詞の本来の意味は、恐らく「侮辱する」というようなことでしょう。そうすれば、エミシをの「を」が問題になって来るでしょう。これは、助詞ではなく、名詞の「男」のをと推測します。

もし琉球諸語の **pīdar* が「エミシを」の歌謡にある「ヒダリ」と同系の動詞であるなら、この歌の文脈は、「蝦夷男・侮辱され・その蝦夷は百人もいる・と人が言っても・この蝦夷は全く手向かいもしないよ」という解釈が可能になります。

強調したいことは、こういう重要な書物を翻訳するには、原文とその既存の注釈書をそのまま英訳するか、それとも最先端の科学的な方法に基づいて翻訳を試みるかという二つの選択があることです。私個人としては、後者を選びました。そのことを考慮すると、この作業は単なる翻訳ではないということに気付かれるでしょう。

翻訳者として、原文を読んで、今までの注釈書に目を通すと、時々理屈にあわない個所があることに気づきます。その際翻訳の作業を休止して、研究へと角度を変える必要がある場合があります。私は、この段階を何回も踏みましたので、日本書紀の英訳が14年間掛かつ

た理由がよくお分かりでしょう。

別の古代歌謡の例を提示してこの話をもっと進めましょう。神武紀の最初の歌、「うだのたかきに」に次の句があります。

于儼能	うだ 冤田の
多伽機珥	たかき 高城に
辭藝和奈破蘆	しぎ 鳴罌張る
和餓末菟夜	我が待つや
辭藝破佐夜羅孺	鳴はさやらず
伊殊區波辭	いすくはし
區旆羅佐夜離	くちらさやり

現代訳は、「うだの高地の狩場に鳴をとる罌をかけた。私が待っている鳴はかからな
いで、思いもよらず鯨が引っかかった」とあります。ここは皮肉や風刺の意味合いで、期
待した鳴をとるどころか、大物の鯨がかかったという解釈が一般的ですが、問題は、そう
簡単ではありません。鯨が地にいるわけもないのに、まして高地で鯨が罌に引っかかった
という発想は古代人にありうるのが最大の問題ではないでしょうか。

小学館の編集者は、「クヂラをクチと解し、鷹の古語（仁徳紀）とする説もある」と
注釈を添えています。翻訳者として、原文の解釈可能な意味が二つあり、一つは鯨で、も
う一つは鷹です。この二つの解釈のどちらかを選んで英訳をし、残されたものを注に記する
か、あるいは時間をかけてどちらが本当かを調べるかという二つの新しい選択があります。
やはり、私はまた後者を選びます。無論、この方針が必ずしもいつも成功を納めていると
言い切ることはできませんが、訳者としてこれが責任のある選択だと確信しています。

まず、文学という観点からこの歌を見ましょう。ある種の鳥を獲るための罌を仕掛け
たのに、鯨を捕らえたというのは想像しにくいことではないでしょうか。現在もどうでしょ
うか。猪を獲るための罌をしかけて、ほらびつくりしたことにハマグリが引っかかったと
いう発想と同様ではないでしょうか。当然現代人は巧みに考えるので、この比喩から何か
の発想があると言うのでしょうか、古代人はどうでしょうか。そこまで自然界を分析して、巧
みに考えるのは大きな疑問です。

書紀の話の文脈から言えば、神武天皇の敵である兄^{えうかし}狛が身を隠して、天皇とその王軍
を攻撃しようとしていることを念頭に置かなければなりません。兄^{えうかし}狛という名称は文脈に
添って、ふさわしい名前でしょう。兄^{えうかし}狛の狛という字は「悪賢い」という意味です。それ
故、天皇は鳴をとるための罌を仕掛けたにもかかわらず、幸運にもほかの鳥を獲物にしてい
る鷹がかかったのは天皇の使命の正当性をアピールすることになるでしょう。こうして解
釈した方がより合理的ではないでしょうか。その意味合いは、自分の家族（国家）を養う
ため、鳴という糧を獲る罌を仕掛けたが、鷹（敵）が罌に引っかかったので、結局その家族
のもっと根本的なニーズ（防衛）を満たすことができたということです。この歌の原始的

な発想から、日本書紀の編纂者たちの儒教的な教養が見えるでしょう。

次に、言語学的な角度から説明を加えましょう。またアクセントという原点から出発すると、區旻羅のアクセントは低高低(LHL)です。ここで、小学館の編集者たちが前に指摘した仁徳紀にある記録を紹介しましょう。仁徳紀には、ある者が朝廷に変わった鳥を献じ、天皇は見たことがない鳥であったので、百済系の酒^{さけのきみ}君を召して、これはどういう鳥かと問い掛けたとあります。酒君は「百済の俗^{ひと}、此の鳥を號^{なづ}けて俱知^{くち}という」と答えました。書紀の編纂者がつけた注には、この鳥は今いう鷹であると記されています。即ち、日本語でいう鷹は百済語で俱知ということになります。俱知のアクセントは、低高(LH)で、罨に引っかけたクデラと同じで、この百済語の言葉に「複数」を表す語尾のラが付き、チがヂに変化しました。

うだの高城の城^きという語も、鷹^{くち}という語も百済語ですが、この歌謡になぜ百済語が入っているのでしょうか。一つ考えられるのは、昔の神武天皇の時代でさえ、文学の高い教養と風潮があったということのアピールするだけではなく、神武天皇がヤマト・朝鮮半島の支配者に相応しい才能者であるというイメージを強めるために百済語を入れたということです。

次は「神代紀」の英訳という問題に入りたいと思います。スサノオ神が高天原から追放されて、出雲に到着する話は有名ですが、そこでスサノオ神は嘆いている夫婦を発見します。スサノオ神が泣いている理由を聞いたところ、ある恐ろしい大蛇^{おろち}が娘たちを一人ずつ年毎に食べてしまっていると漏らします。ここでこの大蛇^{おろち}の解釈が問題になってきます。正式な名前は、八岐の大蛇^{やまた おろち}で、学者の定説として、頭や尾が八つに分かれている(八股)です。しかし、日本書紀の書き方、八股を文字通りに解釈すると、この大蛇^{おろち}は九つの頭があるはずで、股が一つあれば、頭や脚が二つあることになります。しかし、「古事記」には、このオロチは、「有八頭八尾」と記録されていて、書紀と多少のずれを見せているように思われます。解釈の鍵は、マタという言葉にあります。

最近、ハワイ大学のヴォヴィン氏は、このマタという語が「頭」を意味し、古代朝鮮語に同系の語が存在すると発表しました。12世紀に編集された「鶏林類事」という書物に「頭」は、中期朝鮮語で麻帝という音仮名で書かれ(鶏林類事、#161)、ヴォヴィン氏は*ma-tayという語形を再構築し、ヤマタの「マタ」と同源であると論じました(Vovin (2000:143))。ヤマタはまさに八頭という意味で、日本書紀と古事記の間に齟齬がないことを確認することができます。日本書紀が編修された時代にマタという意味がおぼろげになり、股という当て字で書くことになったに違いありません。

最後に、神代紀にある二つの島の名前の解釈という小問題を言及して終わりたいと思います。その二つの島とは、オノゴロ島と淡路島です。オノゴロ島は、礮馭慮という漢字で表記されますが、礮は中期中国語前期のʔinを表し、音韻表記で eue を連想させる表記です。礮には「雷のような音」という意味がありますので、日本書紀の編纂者がこの字を選んだ理由は、二重の意味を込めるためです。一つは、単なる音仮名ですが、もう一つの意義は、中国語を読める人に「高天原の神々の業は、雷のように驚異的である」という

印象を与えることです。この事実をできる限り英訳に入れるべきだと思います。

最後に、イザナギとイザナミが淡路島を造ったとき、「心には嬉しくない」といって、アハジと名づけたと書かれていることから、吾恥という潜在的な意味があることは定説になっています。祝詞の鎮火祭^{ほしずめさい}には、黄泉に後を追いかけて、イザナギは妻のイザナミの忠告を無視して、彼女の本当の状態を見てしまうので、「吾乎見阿波多志給比津」（吾を見あはたしたまひつ）とイザナミが嘆きます。その意味は、「私を見て、私を不愉快にさせてしまった」となります。この祝詞にある apat- という動詞形は、淡路島の名前の apad- と関係があると仮定します。その意味は同じで、書紀の文脈、嬉しくないと同様の発想で、不愉快です。

3. 結論

結論として、日本書紀は複雑な文献ではありますが、多くの翻訳の難問は、言語学を通して解決可能であることを強調したいと思います。既に述べたように、言語学がすべての問題を解決はできませんが、私の翻訳の中で多くの今まで未解決の問題が解けたと確信しています。

日本書紀は色々な現存しない文献から編纂された書物ですので、様々な分野において、この書物の訳が非常に重要になってくると思います。だからこそ、大雑把な英訳はかえって、学問を妨げることになるかと心配します。日本書紀は複雑な文献なので、その種種の問題をできるだけ解決する方向に努力すべきだと思います。今日提示した言語学の原則を使うという一つの解決方法は、私のプロジェクトにとって一つの救いでした。

参考書

澤瀉久孝. 1967. 時代別国語大辞典、上代編。三省堂。

Oxford English Dictionary. Oxford: Clarendon Press; Oxford ; New York: Oxford University Press, 1991

Pulleyblank, Edwin G. 1991. *Lexicon of Reconstructed Pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*. Vancouver: University of British Columbia Press.

Schuessler, Axel. 2001. "Later Han Chinese (LHan)". Private manuscript. Used with permission of the author.

Vovin, Alexander. 2000. "Pre-Hankul materials, Koreo-Japonic, and Altaic." *Korean Studies*. Volume 24, pp. 142-155.

質疑応答

【司会】どうもありがとうございました。40分ですばらしい日本語で、まさに目の覚めるような、神経細胞をフル回転しないと理解できないような、少なくとも私にとってはそういう報告でした。

それでは、これから40分ほど質疑応答に移りたいと思いますが、その際にはお名前と所属をおっしゃってください。これは、録音をしてまたいずれ書物になると思いますので、その点をよろしくお願いいたします。ぜひピンポイントの質問を心がけていただいて、多くの方に機会を提供していただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。どなたからでも結構です。いかがでしょうか。

【松井】大阪国際大学の松井と申します。大変興味深く伺って、私自身もいままで気がつかずにいて、おもしろいなと思ったものはオノゴロ島に漢字の使い方が、中国人にある印象を与えるためのお話がありまして、これ自体が1つのポイント作業ではないかと思いました。

その際、先生は『古事記』の評価との比較などをどのように翻訳、英訳に生かされているのかということにちょっと興味を持ちました。

【ベンテリー】その訳には直接『古事記』のあれこれは入れていませんが、私の『日本書紀』の英訳は大体1,300ページになっています。それで、注が2,000以上ありますので、『古事記』と『先代旧事本紀』との比較を全てに入れています。そして、今のワープロソフトの進歩によって漢字をそのまま入れることができるようになりましたので、今度の英訳には漢字が結構出てきます。

それで、読者にとってそれがはっきり比較できるように工夫はしてあります。『古事記』はやはり音仮名が多いので、『古事記』を見ると1つの音節に大体1つの音仮名という印象が非常に強いのですが、こう考えると『古事記』はひとりの人の日記のようなもので、『日本書紀』はある村の日記のようなものという感覚です。つまり、万葉仮名の多様性が『日本書紀』にあるのに、『古事記』にはほとんどないわけです。これで、答えになっていますか。

【松井】もう少し具体的に、例えばオノゴロ島の、先生は中国人にあるイメージを与えるという点で翻訳なさって、そのまま翻訳なさっているのか。あるいは、先生の英文が……。

【ベンテリー】そうですね。まあ、島の名前ですから、いまのところは「オノゴロ」というふうに英語にして注を振っているんです。というのは、明治時代にチェンバレンという方が『古事記』を翻訳したときに、神名や地名を全部そのまま英訳してしまうんです。読者にとってそれは非常に読みづらいので、私の方針としては『日本書紀』の英訳ができる限り、多くの方々に読みやすくするために、できるだけ英語をそのままにして、強調したいポイントは全部注に書いてあります。ですから、オノゴロ島はそのまま「オノゴロ」というふうに英語で書いて、注には「雷のような力」とか、そういうふうに注に入れているんです。

フィリパイという人の『古事記』の英訳には、万葉仮名の多いのを表すために苦勞した

らしいんです。いろいろ特定の記号を使ったりします。あれは逆に、言語学者ではない読者には非常に読みづらいんです。それで、私はどうすればいいかということで、一応、古代歌謡だけはその歴史的仮名遣いをローマ字で左に書いて、右側は英訳にしました。神名、地名とかは、現代語のいわゆるヘボン式のローマ字で書きました。難しい選択ですが、1,300 ページの原稿ですから多くの出版社はこういう複雑な原稿を断る傾向があります。ですから、ある程度彼らのニーズに応えなければならないのですが、注がいっぱいついてるのは私、最後まで意地で通します。

【司会】ありがとうございました。それでは、次の質問。

【藤本】皇學館大學の神道研究所の藤本と申します。神名のことで先生もご苦労されたのではないかと思います。特に私どもでも「日本神名辞典」などいろいろ副題もありますが、その場合に『古事記』と『日本書紀』とで神名が同じものは当然ありますが、若干名前が違っていたり、若干表記が違っていたり、もちろんあててある漢字も違っていたりするので、その辺のところを先生はどのようにご苦労されたのかというところが若干気になったものですから。昨日も、天照大神のお話もありましたので、その辺をちょっとお伺いしたいと思います。

ある辞典の神名解釈を書かせていただいたので、私もその辺で『古事記』と『日本書紀』が非常に違ったものですから、後で翻訳したものが受け手側、それを見る側によってそれが当然だというふうに思ってしまうので。そうすると、『古事記』に書いてある神名とこちらの神名は違うのではないかと。違う神様ではないかというような受け取り方もできてしまうものですから、その辺をお願いいたします。

【ベンテリー】『古事記』の場合は、ほとんどの名前は音仮名で書かれているのです。『日本書紀』はそれを嫌って漢字で書いています。幸いに、神の世の第1、第2巻、上下のほうは、多くの神名は段落の最後に音仮名で表記が書かれていました。時々、その音が違う場合は『日本書紀』の綴りをそのままローマ字で書きました。そして、注に、『古事記』の場合は、この神の名前はこういうふうになっているということを付記しました。天照大神の場合は、正確に覚えているならば大体4つの名前が出てきます。一番著しいのは、大ヒルメのムチです。私は、はっきり言ってこれは違う神だと思います。ずいぶん名前が違うので、『日本書紀』の編纂者たちが勝手にグループにしてしまったのだと思います。私は、できる限り紐を解くように注を振ってありますね。

もう1つ苦労したのは、朝鮮半島の地名がたくさん出てきて、あれはほとんど音仮名で書かれているので、私は中期朝鮮語で表記しました。ですから、そこだけは普通のローマ字と違って、せつかく5～6世紀の地名の綴りが入っているから、中期朝鮮語の表記にしていますが。ですから、簡単に言うと注にまた入れています。仕方がないのですが、英訳をそのままローマ字で表して、注には、こういう人と『古事記』は恐らく同一人物とか、そういうふうに一応解決しました。

【司会】よろしいでしょうか。次、どうぞ。

【青木】國學院大學の青木でございます。歌謡の解釈は、私も一応歌謡を専門にしており

ますので、これはちょっとまた別の機会ということで、きょうは基本的な考え方でぜひ伺いしたいと思います。

たしか『神代紀』の問題、ヤマタノオロチの「マタ」と「アタマ」の問題ですが、これは私なども授業などで学生といつも話しますが。そのときに、頭が8つ、尾が8つとか、8つが不可能か可能かということはまたちょっと考え方で、必ずしも、股があるから頭が2つだと考えてなくてもいいだろうと私は思うのですが……。

それよりも、むしろ「マタ」というのは当て字というふうな言い方をなさって、そのときに必ずからんできますのが、中国語で『日本書紀』をできるだけ解釈していこうという立場の場合に、おっしゃったようにいろいろな神名なども含んで訓注とか、「こう読みなさい」という指示がございます。あの問題は、実はいま日本でも非常に問題になっています。私も議論に参加していますが、例えばあれはここではこう読む。「ここ」というのは、日本では中国の、つまり漢字ではこういう意味なのだけれども、日本ではこういうふうに読むという注記なのか。それとも、この字は日本ではではなくてこの文脈、この場面ではこう読む。まあ、『古事記』などはそうです。「これを」は「何とか」と読むとか、この字はこう読みます。

そうすると何が違ってくるかと申しますと、発表の根幹にかかわることだと思いますが、この『日本書紀』という書物をどういうふうに解釈するかというときに、もともと日本であった伝承なり、あるいは神名なりでもいいのですが、それを中国語で一旦置きかえて翻訳して、そして、それをさらに『日本書紀』は、日本の伝承として書こうとしているのか。そうではなくてあくまでも、これはあったかなかったかわかりませんが、いわゆる漢語というものを前提として、それを踏まえて『日本書紀』を解釈すべきだ。その基本的な立場というところが、両方ともいま立場がありますから。最初に発表者がおっしゃっていた、中国語で読むのだという基本姿勢、それは1つの態度として一貫されていると思いますが。そのときに定本として、訓読をどの程度ご自分の中でどういう意識で取り入れられて解釈に用いられたかという、その辺を確認したいというのが私の質問です。

【ベンテリー】まず私の基本的な方針といえますか、正直に言って私は、梅沢伊勢三の研究に非常に影響されています。『日本書紀』は720年にできたということがよくアメリカとか、多分、日本の高校とかそういう記述がよく出てきますが、『日本書紀』の素材は、それよりはるかに古いわけです。

『日本書紀』と『古事記』を比較すると、漢文のでき具合が全然違います。『日本書紀』も立派な漢文になっているので、恐らく、百済とか中国から来た知識人が携わったのではないかという感じがします。私の方針としては、もしそうだったら、やはり漢文として見るべきだという意識が強いのですが、青木先生がおっしゃったように日本語が潜在的にあることは否定できません。ですから、漢文で読むか、和文で読むかとどちらにするかという問題にもなりますが、翻訳の作業を始めた14年前は、日本古典文学体系の『日本書紀』しかなく、訓注に関しては、日本古典文学大系に頼るぐらいしか出来ませんでした。

一応、最初のほうにあるようにいろいろな写本と比較して、この訓注はこれだったとい

う研究は一応されていることを前提にしてやりましたが、時々疑問があったときは天理大学の天理図書館善本叢書の写本を自分で確認しました。やはり金銭的な問題もあるから、それぐらいしかできないのですが。一応、自分で確認したつもりです。

【青木】ありがとうございました。訓注の問題はいまおっしゃったことと、要するに、私は『古事記』と『日本書紀』の訓注を全部比較してみたわけです。そうすると、訓注はほとんど似ていると同じです。

それからもう1つは、天理大学の『善本叢書』で出ている巻三以降も含めてですが、上の兼夏本の万葉仮名の訓を比較すると、それと訓注がよく合っているわけです。そうすると、一字一音で書かれている『古事記』と『日本書紀』と同じ言葉が当たっているものを、それを解釈の中で『日本書紀』は漢字で置きかえている。それを、むしろ漢字で読むべきなのか。それとも、『古事記』の場合、音仮名なら音仮名で読んできた。その問題がどうしても浮かび上がってくるものですから、その辺が、どちらか統一できればいいと思います。先生の考えは非常によくわかりましたので。ありがとうございました。

【司会】ほかの方はいかがでしょうか。はい。

【安蘇谷】國學院大學の安蘇谷です。私は神道が専門で、『古事記』『日本書紀』も詳しくはやっていなくて、どちらかと言うと自分の信仰に具合のいいようなとり方をして、あとは、ほかの人たちの注釈で間に合わせているという非常に安易な方法でやっているわけです。

ただ、そういうときに非常に失敗するのは、自分が「これは具合がいいな」と思っても、いま先生がおっしゃったように、「言語学的に間違っている」と言われると非常に困るわけです。やはり宣長の『古事記伝』を見ていても一番基本は、そういう言葉に対する、宣長の時代の一番新しい文法なり、あるいは言葉の解釈なりでやっている。そこに宣長のすごさがあると思います。ですから、その意味では「言語学的にこうなのだ」と言われると我々もどうにもならないのですが……。

ただ、1つ本当に一言……、その例をちょっと挙げたいと思いますが、例えば「^{けが}汚れ」という言葉を一般的に「気が枯れる」、それで「汚れ」。ただ、これは言語学的には「け」と「かれ」を分けてしまうと具合が悪いということで、「^{けが}けが」という言葉に近いのではないかということを言う言語学の先生がいると、「ケ・ガレ」と分けると、我々としては気が枯れるのだからそれをもう一度復活するとか、蘇生するとか、そういうのは非常に説明として具合がいいのです。

だけど、そういう使い方が間違っていて、「け」と「かれ」を分けてしまうと具合が悪いということになれば、やはりそれは説明としてはおもしろいけれども言葉としてどうかということになるわけです。その意味で、先生のご発表に敬意を表して、ましてや『日本書紀』を全部注釈して1,300ページにまとめたとなると頭が下がりますので何もご批判はできませんが。

1つ教えていただきたいのは、百済の言葉を、例えば、「クジラ」を「俱知」という言葉で入れたということが、百済人たちに対して神武天皇が支配者としてふさわしいとか、こ

れはどういう根拠でそういうお話が出たのか、ちょっとご説明をお願いしたいと思います。ちょっと言語学的ではないと思ったものですから。

【ベンテリー】わかりました。それを語る前に、「汚れ」の話で、1つ言語学者として私が痛感していることは、これは主に欧米で起こる問題だと思いますが、言語学者と歴史学者の間にトラブルがよくあるわけです。なぜかと言えば、言語学者は偉そうに「それは間違っている」と指摘するわけです。

私は、もし言語学者が間違いを指摘するのならば、では解決としてどうすればいいかという答えまで準備して教えていただきたいのです。ですから、例えば「汚れ」の語源が違えば、では、言語学者なら「どうすればいいのか」とか、言語学者としてはそこまで勉強してほしいのですし、私は、一応そういうつもりで言語学に臨んでいます。

次の質問ですが、『日本書紀』にある百済語は60語ぐらいありますが、私は2～3年前にそれを拾ってある論文を出しました。百済語が入っているわけがよくわからないのですが、百済人が携わったのではないかと思います。

問題は、それが事実であるならば、神武天皇が朝鮮半島の支配者というくだりがおかしくなるのではないかという感じがします。

【安蘇谷】意味がちょっとわかりにくかったので、もう一回お願いします。

【ベンテリー】もし、百済人が『日本書紀』の編纂に携わったとします。それが事実であるならば、さっき言ったように神武天皇の歌に百済語を使って、神武天皇が逆に百済を支配しているというところが何かおかしくなりませんか。百済人だったら、日本の天皇が自分の国を支配しているようなことは一切携わりたくないと思います。また梅沢先生の説に戻りますが、多分『日本書紀』は3段階ぐらいを経て編集されたと思うので、その第1段階で百済人が参加して、第2、第3段階でいなくなったとか。そういう経路で『日本書紀』が編集されたならば、問題は解決できるのではないかと思います。

【安蘇谷】大変おもしろい比喻で『古事記』は一人の日記であって、『日本書紀』は村の日記である。神道思想家の中でも、『古事記』と『日本書紀』に対する評価というものは時代によっても違うわけです。ただ、ちょっと気になったのは、そういう日本と朝鮮との関係が非常に難しい問題を含みますが、初代の神武天皇の中に既に朝鮮半島が自分たちの支配地であるような、そういうイデオロギーがあったのかどうかという、そのところがちょっと疑問です。

【ベンテリー】わかりました。また同じように、『日本書紀』が、多分初期の段階で編纂されたときには神武天皇は千何年も前にいたということはなかったと思います。ですから、初期の段階で神武天皇は多分3世紀ごろの人間だったと思います。それだったら、百済時代と並行できますね。その後は一応中国と同じように、時間を1,000年ぐらい延ばさないといけないから、神武天皇が紀元前660年になったということは次の段階だと私は解釈します。

【安蘇谷】それはいろいろな解釈があつていいと思うので、私は神武天皇はいたと思います。ただ、2,663年前にいたかどうかは問題だと思う。ただ、そこで、そういう意図が本

当に初期編纂者にあったかどうかとも問題で、つまり、暦、カレンダーを日本が支那から輸入したときに、660 年、つまりオウシの年ですから、神武天皇が革命の年に即位したというふうに合わせていって、シンコチョウに 660 年ぐらい誤差が出たということはある得ていいと思います。だから、それはイデオロギーがあつてやったのかどうかはちょっとわかりません。また、『日本書紀』の中に何十、何万、何千年前みたいな記述もある。

ですから、それについて私は意図的にどうこうだという考え方はとらないのでちょっと別にしておきます。また、『日本書紀』そのものの編纂の段階がそうあったということもそのとおりだと思います。私が申し上げたかったのは、日本人の中に、例えば神武天皇のときから朝鮮半島を支配したいとか、そういうイデオロギーが本当にあったのかどうか。あったとしても別に構いませんが、例えば日本列島ということを考えるとどうしても朝鮮半島が日本の防衛の一番初めですから、ですから、近代になって日本が朝鮮半島を侵略したとか何とかではなくて、江戸時代の人たちが朝鮮半島をきちんとしないと日本は安定しないという考え方があったと皆言っているわけですから。そういうイデオロギーが近代以降につくられたのは大間違いで、日本列島を防衛しようと思えば朝鮮半島が一番気になることですから、それはいいわけです。

ただ、いまおっしゃった神武天皇の時代にもう既に、もし朝鮮半島を支配したいというような、もうちょっと事例として挙げられることがあったら教えていただきたいと思います。むしろ、もしそうだとすると朝鮮半島と日本との関係が、もともと朝鮮半島から日本へやって来た人たちがまた元へ帰りたかったのか。その辺のところまで推測したいと思ったものですから、もしそういう現象や事例があるのでしたら、ちょっと教えていただきたいと思います。

【ベンテリー】ありません。指摘はよくわかりますので、それは今度の研究に、まだ『日本書紀』は出版されていないので訂正することはできます。おっしゃるとおり、もしほかにないのならば、任那の国で出てくるのは斉明天皇ですから十何人の天皇と隔たりがあります。ですから、いきなり百済が神武天皇の時代に出てくるのは不自然であることはおっしゃるとおりです。

【司会】言語学的な問題からちょっと社会関係といいますが、少し広がってまいりました。それは様々な解釈が入り込む余地がありますし、その当時の社会構造といいますが、例えば、百済人の社会的な身分の問題、位置の問題、これはなかなか難しい。それをどう解釈して翻訳に取り入れるかというまた別の新しい課題がありますので、そこは、例えば、注である程度の立場を表明するにしても、「こういう社会的な構造だったので、こういう訳にすべきだ」と言い切れない困難さがあるのではないかと思います。

それでは、ほかの方どうぞ、ピンポイントで一つ。じゃあ、田島さん。

【田島】天使大学の田島です。40 年にわたる研究、本当に敬意を表したいと思います。ぜひ出版されたら読みたいと思いますが、それを日本語に翻訳してもまたおもしろいかと思っています。

南島のほうに私は興味がありまして、先ほど、先生が石垣、先島のほうの方言を利用さ

れている。その大前提はやはり方言周辺論というか、いわゆる上代の言葉は時代を経て、いわゆる偏狭の地に残るであろうという理論だと思います。ほかに例えば、『日本書紀』の中でいわゆる先島に残っているだろうというものでどんなものがあるのか、ちょっと教えていただきたいと思います。それと、方言周辺論を採用された根拠についてもお聞かせ願いたいと思います。

【ベンテリー】最後のほうがまず答えやすいと思います。私の1つの専門は琉球諸語の研究ですが、服部四郎先生も指摘したとおりに、おそらく、紀元後500年ごろは九州の言葉と沖縄の言葉が分かれたという研究に基づいて、沖縄の言葉は最終的には日本語と同系であるということです。

私の研究の1つの課題としては、沖縄の言葉を「方言」と言わずに、ちゃんとした言語として言ってほしい。でも、そういうふうになってしまうとナショナリズムとかいろいろ出てくるのであまり旗を揚げていないのですが。でも、沖縄の言葉は4つの言語がはっきり分けてあります。よく誤解されるのは、沖縄が違う言葉だから沖縄の言葉はすべて古いという考え方です。言語学ではそれは成り立たないのです。やはり、ある言語が1つの親の言語から分けられるときには、すべての新しい言語にはある程度古い言葉があるわけです。ですから、沖縄のほうは別に特定の地位ではないけれども、沖縄の魅力としては、島だから古い言葉は標準語に抹消されてはいないということです。

私は九州に12年間ぐらい住んでいましたが、九州の年配の方々と話すといろいろなおもしろい言葉が出てきますが、標準語が広まっているのでそれがなくなるわけです。例えば、ワニの話、稲羽の素兎の話が出てきましたが、ワニはどういう動物だったかとか。別にデータはありませんが、恐らく、ワニは沖縄語でサメの意味ではなかろうか。いまそれを調べようとしています。もし、それが立証できればうれしい話ですが、まだデータがないので公表できません。私はいろいろな神話の辞書を持っているので、この言葉が解明しにくいと思うならば、沖縄でヒントを得られるのではないかと考えて調べるんです。

ただ、言語学の原則に基づいて音韻的に一致していなければ取り入れることはしません。最近、学問でない方々が沖縄の言葉とか九州の言葉を使って、朝鮮半島の韓国語との比較などをやっていますが、音韻原則の一致は全然なっていないので説得力がありません。言語学者としてはそれを一応気をつけているつもりですが、でも、人間ですから手落ちはあると思うので。そういう前提で沖縄の言葉を使っています。

【司会】それでは、後ろの女性の方。もうあまり時間もありませんので、ぜひ早くお願いします。

【森】国際宗教研究所の森と申します。昨日の『古事記伝』といい、きょうの『日本書紀』といい、これからの文献研究は英訳や外国語訳も参照しなければいけない段階になっているという認識を新たにしました。そこで、きょうのお話でいきますと、書かれた当時の表記原則に戻って考えるとしても、中期中国語・前期と初期漢代中国語と、そして朝鮮語と何種類かの可能性が混在して書かれていることになります。このあたりの弁別、判読というのはどのようになされているのかお聞きしたい。つまり、「これは朝鮮語である」という

ふうに決める決め手というか、どうやって判断できるのかということです。

次は、そうした基準がある程度明らかになって、その表記のまとまりがグルーピングできていけば、先ほどお話にあったような編纂段階説を表記のほうから裏づけていける可能性も視野に置いていращやるのかどうか、この2点をお伺いしたいと思います。

【ベンテリー】まず逆にすると、森博達先生という方がそういう本を出しています。彼の研究によると、『日本書紀』の表記は大きく分けて2つのグループがあるそうです。いわゆる、 α と β です。なぜかわからないけれども、 β のほうが古いです。 α を古いほうにしてほしかったけれども、 β のほうが古いのです。

これはすばらしい研究ですが、残念ながら、森先生は、カール・グレンの中国語の再構築に頼っているのでもちょっと問題が出てきます。森先生の説としては、『日本書紀』は1人の中国人によって書かれたというのですが、これは音韻から見れば成り立ちません。なぜならば、特にハ行のピーの使い方をよく見ると、中国人でしたら犯さないはずの間違いが入っています。ですから、百済人であろうと日本人であろうと、中国語が母国語でない方が音仮名をつけたのは簡単に立証できます。

一番初めの問題に戻りますが、中国と朝鮮半島、音仮名表記の使い分けは、大体そういう研究も前からされていて、もう亡くなられたけれども木下礼人という方がいろいろなすばらしい研究を出していて、私はそれをもとにして研究しているのですが。その話は非常におもしろいのですが、長くなるから一応これで……。

【司会】それでは、時間もあれですから最後の質問を。どうぞ。

【ヘイブズ】簡単に答えることはできないと思いますが、斉明天皇紀6年の^{わぎょうた}童謡が解明できないとされているというところがありますが、それについて簡単に。できれば、どういうふうに解明できたか、何か逸話があればお願いします。

【ベンテリー】はい。一応、斉明紀の解読不明の歌という話を発表に入れようかなと思いましたが、内容が非常に難しく、結局省きました。簡単に言うと、ご存じない方がいらっしゃるかもしれませんが、いまのところで、斉明紀の122番の歌ですが、これを解読するためには、音仮名の順番を変えて解釈するというのは始期の時代から行われているわけですが、この歌の最初の三つの句を上げたいと思います。

二三四五一六 八九七十 十一十二十三十四十五
摩比羅矩都能 俱例豆例 於能幣陀乎

このように、数字をつけて、正しい読み方を教えようとしています。原歌の「まひらくつの・くれつれ・おのへたを」という意味不明の文が、書き換えられて、「妻開くの・造れる・小野へたを」というふうになりますが、問題は、小学館の『日本書紀』にあるように、原歌においてある句が3回もちゃんとあるので、順番を変えなくていい証拠になるのではないのでしょうか。

私は何年かかけて見たのですが、やはりこの童謡にも百済語が入っているので今まで解読を不可能にしていたのですが、これを裏付けるために1つの例を挙げたいと思います。

「俱能理歌理鵝（くのりかりが）」という句があります。これを見ると、百済語で考えれば

こういうふうに分けることができます。「Ku」は、現在の韓国語で「コレ」という意味です。「Ku」は、やはり「コレ」の「コ」と同源であるといろいろなアメリカの史的言語学者が言います。「ン」は、日本語で言う「ノ」。だから、「Kun」は「コノ」で、「orik」は百済の女王を意味します。これは、中国語再構築では「オルク」(*olük)というふうになっています。

問題は、このウムラウトがついている「ü」は、日本語の「う」でも「い」でもなり得るわけです。『日本書紀』には、百済や高句麗の後が出てくると「オルク」という振り仮名がついています。この歌は「orik」というふうになっていて、母音の高さが非常に大切です。「オルク」でも「オリク」でも、これらの両方は母音が高くて、これは非常に大切です。ですから、「ari」は動詞の「アリ」です。というわけで、この「kun」は侮辱的な意味合いがあって、英語の例として、ドイツ語の「der Fuehrer (その指導者—ヒトラーを指す)」の「der (男性冠詞)」には嫌な気持ちが入っているわけです。ですから、私は「あの馬鹿野郎、后が」というふうに解釈しています。

この大切な、三回も繰り返されている句は、こう解説します。

kun orik ari ga

この馬鹿な后がいて、

最終的に、この斉明紀の歌は百済人によって書かれて、「何であなたたちが、私の国をもっと早く救いに来なかったか」というような意味で解釈しているのです。一応論文はありますが、これを私の日本書紀の英訳の後ろに入れるつもりです。もっと詳しく知りたい人がいれば、また詳しく話しますが、ここでは簡単にしたいと思います。

【司会】ありがとうございました。それで、この『日本書紀』の英訳はいつ出るのでしょうか。

【ベンテリー】うまくいけばあと2年ぐらいです。

【司会】そうすると、苦節14年プラス2年、16年。阪神の優勝より2年早いぐらいです。からいいかなという感じがしますが。ぜひ、期待をして心待ちにしたいと思います。きょうは本当に、どうもありがとうございました。(拍手)